

## 顎関節症患者の気分プロフィールに関する研究

著者	酒寄 照之
号	34
学位授与番号	500
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/42252">http://hdl.handle.net/10097/42252</a>

氏 名 (本籍) : 坂 寄 照 之 (茨城県)

学 位 の 種 類 : 博 士 (歯 学) 学 位 記 番 号 : 歯 博 第 5 0 0 号

学位授与年月日 : 平成21年3月25日 学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 : 東北大学大学院歯学研究科(博士課程) 歯科学専攻

学位論文題目 : 顎関節症患者の気分プロフィールに関する研究

論文審査委員 : (主査) 教授 菊 池 雅 彦

教授 笹 野 高 嗣 教授 佐々木 啓 一

## 論 文 内 容 要 旨

POMS (Profile of Mood States : 気分プロフィール検査) は、ストレス反応によって惹起されるほぼすべての気分・感情を網羅した6つの気分尺度を評価する質問紙法であり、心理的因子の評価に有用である。しかし、顎関節症患者を対象に POMS を実施した報告は少ないため、顎関節症の新患患者を対象にした横断調査を行い、POMS の判定結果を明らかにするとともに、気分プロフィールに問題を認めた患者の特徴を検討した。

被験者は、東北大学病院附属歯科医療センターに来院した顎関節症の新患患者82名とした。Research Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders の日本語版をもとに作成したプロトコールと質問表に従い、各患者の病態や慢性疼痛に関する評価を行った。気分プロフィールの評価には POMS 短縮版を用いた。6つの気分尺度 (「緊張-不安」, 「抑うつ-落ち込み」, 「怒り-敵意」, 「活気」, 「疲労」, 「混乱」) ごとに合計得点を算出し、その得点が健常範囲内と健常範囲外のいずれに含まれるかを判定した。

その結果、気分尺度が1つでも健常範囲外にあった患者は43名 (52.4%) であり、全体の半数を超える患者に気分プロフィールの問題が認められた。このうち、専門医 (精神科, 心療内科) の受診を考慮しなければならないほどの明らかな気分プロフィールの異常を認める患者は8名 (9.8%) であった。気分プロフィールに問題を認めた患者の多くは、複数の気分尺度が健常範囲外と判定されており、尺度別では「活気」の低下や、「混乱」の亢進 (当惑, 思考力の低下) を示す患者が多かった。

また、6つの気分尺度がすべて健常範囲内であった患者群 (POMS 健常群) と、1つでも健常範囲外と判定された尺度をもつ患者群 (POMS 異常群) を比較した場合、POMS 異常群ではⅠ型 (筋障害) およびⅢ型 (関節障害) を有する患者が多く、Ⅲ型において有意差が認められた。症型を細分類すると、POMS 異常群でⅠ型とⅢ型を併せ持つ症型 (Ⅰ+Ⅲ型, Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ型) の患者が多い結果となった。臨床症状については、自

発痛の有症率が POMS 健常群で17.9%, POMS 異常群で44.2%となり, 両群間で有意差が認められ, さらに慢性疼痛の程度を表す CPI (疼痛強度特性) も POMS 異常群で高く, 健常群と比較して有意差が認められた。

以上の結果, 顎関節症患者の約半数に認められた気分プロフィールの問題は, 関節障害などの疼痛の存在や強さと関連していることが示唆された。これらは疼痛をさらに持続させたり, 悪化させたりする因子になりうることから, 臨床においては心理的因子に対する適切な指導と管理が必要と考えられた。

## 審 査 結 果 要 旨

顎関節症患者の心理状態を把握し, 症状との関連を診断することは, 個々の症例に対する的確な診療のみならず, 顎関節症における心理的因子の関与を明らかにするために必要である。特に昨今においては, 様々な心理的問題を抱える症例が多数来院しており, 心理的因子を評価することの重要性はまさに高まっている。このような現状を踏まえ, 本論文では日常生活で持続的に生じている気分・感情を評価する気分プロフィール検査(POMS)を用い, 顎関節症患者の気分・感情の様相を検索するとともに, 臨床症状との関連性について検討している。気分プロフィール検査は, ストレス反応で惹起されるほぼすべての気分や感情を網羅した6つの気分尺度の同時評価が特徴であり, 個人の心理状態を詳細に知ることができる。近年では顎関節症の発症に抑うつや不安以外の心理的因子の関与を指摘する報告もあることから, この検査を顎関節症患者に適用し, 患者に認められる気分・感情を多角的に検討したことは評価に値する。また, 本症への心理的因子の関与を明らかにするためには縦断調査が必要であるが, 本論文で行った気分・感情と臨床症状の関する横断調査は今後に予定される縦断調査の立案に有用な示唆を与えると期待される。

本論文の結果によると, 気分プロフィールの判定で6つの気分尺度のいずれかに問題を認めた患者は半数を超え, 明らかな異常を認める患者も全体の1割に認められた。これら患者のほとんどが複数の気分尺度で問題を認め, 特に“活気の低下”や“混乱”(当惑, 思考力の低下)を示す患者が多いことが観察された。複数の心理的因子を抱える患者が多いこと, ならびに抑うつの前に生じると言われる“活気の低下”が多く認められたことは臨床的にきわめて重要であり, いかなる患者においても心理状態を詳細に把握する必要性を示している。また, 気分プロフィールに問題を認める患者群では, 問題を認めない患者群と比較して関節障害を有する者が有意に多く, しかも筋障害を併発している患者の割合が高い結果となった。さらに, 気分プロフィールに問題を認める患者群では自発痛の有症率や疼痛強度特性が有意に高いことも明らかとなった。これらは, 顎関節症患者に認められる多様な気分・感情の問題が, 顎関節や咀嚼筋の疼痛に関連して生じている場合が多いことを示しており, 今後の臨床や顎関節症と心理的因子の関係解明において有用な知見であると考えられる。

以上の理由から, 顎関節症における気分プロフィールの様相を検索し, 気分の障害と疼痛症状との関連の存在を示した本論文は, 博士(歯学)の学位授与に値すると判定する。